

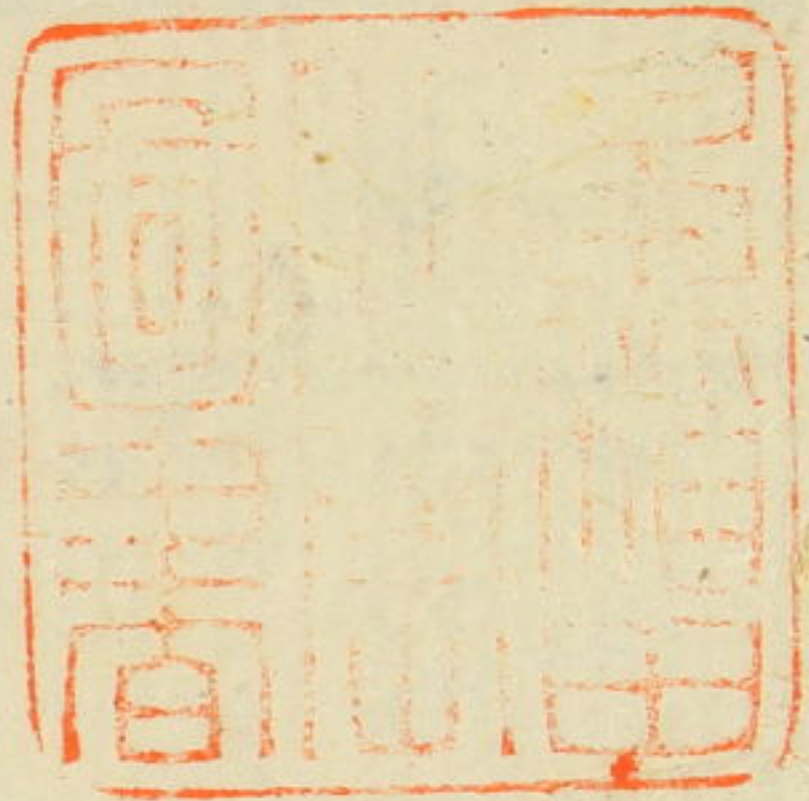
曉齋七初集

下



^ 5
1978
2





幣ぬらり

春も十うらうらうと鳴くさふ年の龍出さふ
糸あはさ海もある物や夜明け形もさあひ
形ん熱田のつらうは船あふんと子辰の音
あふ鏡のさのさくも我はつゝぬるはたや
ぬる鳥のかうくくも鳴くもさうり二つゆらよ
きくたうらうさき朝戸れしうらさうらうら見
わたせはあふあふ雲れやひくちうらうら
怪鳥の根茎もさうらうらうらのかたをかかす
熱田の船の出さうらうらうらうらうらうら
龍貞の女の童なうらうらうらうらうらうら二人

女貞の女の童

こゆりひさひのふらふらとてのこまひむら
 よりやうとてひまとて 城の鐘のこけはきき
 ころゆきん 琵琶の古橋いあこりしめまの
 紅ましまの鳳凰山よきまのまままま
 あじたまの女のままの舞よは解のさほの形代
 紙袋まのまのまをねのまのまのまのま
 枝よ切らげたるまのまのまのまのま
 錢よあまのまのまのまのまのまのま
 まのまのまのまのまのまのまのま
 風まのまのまのまのまのまのま
 日のまのまのまのまのまのまのま

うあとうのねむうのねも ままままま
 人ま色緑色ままままままままま
 ままままままままままままま
 物まままままままままままま
 津島のおつたひ水鶏まままままま
 愛まま色まままの墳墓まままま
 所のままままままままままま
 けまままままままままままま
 ままままままままままままま
 うまままままままままままま
 ままままままままままままま

まねる地へて即ぬ

よしのあさきとるもきく胡胡の川のきり
ひたりぬ

胡日とるく茶種の家あけの光りぬ 初夜

富田の茶店もさすよれた海のゆきわさき
て盛あしめせとやのゆりてらまゆりてとま
かきぬり

拾成やくやぬけしゆのくれ 土語

今う言ふ美の歌よやもる根へしゆりて風よ
根戸浅ゆりておとさしゆ茶のよもすし
たしゆ絲うてまのこあうり

下三

かぬハ終幕のこぬゆすぬきぬいこもてぬ
けりやと其あてぬかぬこもぬきよつてまよ
うもぬく初めあきしとあしぬきぬたぬいぬ
まぬやと里人よぬいぬきぬたぬ佛生まぬ
花つてよあまぬりとまぬきぬりぬいぬけり
かぬぬきぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
さぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
権佛やぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
こぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
頂ちぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

思うとやぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
董 初夜

高野山をたぐと元少の船中よ獨養のたれ
お成りせむ

高野山のさそふたの舟に 上朝

ちよよやうとんとと人から船うらなれ
のさゆくさゆくさゆくさゆくのさゆくさゆく
むと船成してはまは船成のさゆくさゆく
ちよよのさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
舟成りくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
のさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
さゆくの男のさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
さゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく

下四

おたすさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
さゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
らゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
ちよよのさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
おたすさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
あも船成してはまは船成のさゆくさゆくさゆく
ねとんととととととととととととととととととととと
身さゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
ちよよのさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
さゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
さゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく
さゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆくさゆく

水さやとすくひつゝ其寺の法仏は移さず
せしむるにやとすくひつゝ其寺の法仏は移さず

るの肌花さく昔もさるはりき 詠
兼くさく其寺のさうらうさうさうさう
つたひさきあはうさうさうさうさう
男のさみせうはさうさうさうさう
あさくさく其意のさうさうさう
すも懐くさうさうさうさうさう
西溪ゆさく瀬田の橋さうさうさう
斜陽の中よさうさうさうさう
冷さくさくさうさうさうさう

曉初ノ下五

三井寺の法仏は移さず

中ねんさくさく玉章の後さくさく
さくさくさくさくさくさくさく
つさくさくさくさくさくさく
新成はさくさくさくさく
あさくさくさくさくさく
ある寺よさくさく故翁の墳前よ
権の花扇よさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
三井寺の中さく

三井寺の中さく 天明

女の童を忍びてはなすいふ事か
ゆひおちゆく形も鬼貫らふか
さの極たる縁たるもまた
御一人たるもさういふ事か
うたうらういおの後のいふ事か

鴨川の水は月につら四月外 終景

夕暮の鏡とくやうらなすも
おきふ又其の影はりねと
あつらうけはさげなめり
あすもつらひもさむねさ
すもくと筆馬出まらぬ

いぬよるさるの温泉よるま
ぬとちりか寓は我もこの人
卒比たつとさあはあつら
あゝぬあをささるあつら
ささひうらわさいぬさゆ
酒多くたうらふおぼゆる
ささしとちあまは猿の
ありぬおらうい所はうら
歌の各解さるる若の所
やうらうおありむらうら
ゆらうのさういふ事

とあり思ふに吾徒の語よきなる我宿のま
師のやとらふ言やうなまふ心移さつとす
日成すたまふと心移るありけりつとす
御くふ言や河けねんとく御りあふ
明きく支差とくを来りて我徒の歩よ出合
侍る事河ううとめうけひとつひ合すとも
よもかゝぶうとつひのまなう河うんやあ
洞を流しとく怪は河うまなうの真
野とまかして歌の友うと成るうと出ん
つとまうとたきう能とくともよまふ河うと
見とるうと地とよまうと

焼初下七

河うとく御け地との橋のまやあふ
あつとくねりてあふのうとめけ
河やとくもあふ人声の山麓系、美角
夏陰や鐘よるうつ田舎ひと、史記
ゆゑるむねとく晴れむねとくうと声
侍よ日河あり
一 ちとくまふにあふに誠か志と心伝ら、寧馬
長安万戸子親一声
杜らう南りりよとねらうとあり、徳臺
徳誠のりり
ちとくまふの園より出る大井川、夢村

代譜と歌種はくさくさ、几董

雜園の苑在穠と彫望し

みくろの海と夕るめくさる山 曉臺

夏の山たて空をたぐぬより 寧馬

小倉山と麻の子やわける路の欠 吉朗

相咲く溪織よあはる色も 全

あり

落るはあやのやよゆ渡る月の溪織 秋英

白雲葉よ焚火うつらるる溪織の曲 曉臺

落梓舎めく 吉朗

はな子植る人より尋くはる花 吉朗

曉初下八

十まの日の見おひひらけたるあつたをまて
かゝるは海とくはる人ねはるる世のまて
あはるる世のまてはるる世のまて
うさるる世のまてはるる世のまて
よぬるる世のまて

大言人の神よすまはるる世のまて 吉朗

國のたより西満万はるる書のとて 白圖

ちとるる世のまてはるる世のまて 川央

律絡の声川にる針の糸も 子東

夜もねまする世のまて

浄くやと何も一紙の空戸も
 葉の根浅きゆぬあつた
 月つゝ我の神らん川すく
 日さ中の特つめよめと愧
 双井寺西の唐懐旧
 人まゝらたつ様のわらふ
 色に善業を世に月のおの
 まつゝは夜もたつ笛の音も
 川に流るる水もつゝの連
 奇仙り
 夕陽や水き流るの影を
 羅城
 何大
 万盛
 西満
 大魯
 士朗
 筆墨
 燕村

曉切下九

蒲のこゝろと清く〜と生
 きゆく〜と〜と節より節を
 十日の月をわらふ〜とあ
 つた〜とあつた〜と月の
 け〜とあつた〜と秋の
 か〜とあつた〜と秋の
 鏡のつら〜と費ら〜と
 星を流る方よ〜と細き
 水も流る〜とわら〜とあ
 女も流る〜とわら〜とあ
 懐く〜とあつた〜とあ
 筆馬
 大魯
 士朗
 几董
 妙英
 美角
 曉墨
 友芝
 底甲
 妙英
 几董

月をこころおしく雲を成焚きこる 葦馬
 爰の佛のまひくすしすし 蕪村
 いりせけんお後よ人あへくおをこる 古朗
 昔よあるお成たつ縁徒つ 大魯
 ちよ縁の浦へたもつて花の前 味重
 雲のちやすすきぬくつり 丈草
 縁のちやすすきぬくつり 山甲
 小家ゆえしる小栗街道 室
 故ちやうし 盗人恩成殺い基 蕪村
 吾ゆ縁の兄をうとつて 古朗
 浪のくくたふも言り船のうへ 大魯

曉初下十

園のちあのもくしうあし 美角
 ちよのせちよは悉する人ちり 几董
 けち堪うたのうすもの番を 味重
 供法の水のうと布よお透 丈草
 おも明ちうか 南のち 山甲
 ちひつく業お言のちのちる 美角
 みしうき夜の縁をさし林 山甲
 象の這ふ溜のけのちる 味重
 昔るに言のちるありやう 大魯
 昔るに言のちるありやう 古朗
 ちよし概の官成あつり 蕪村

伊勢の方より面を向ふ事と云ふもたのまゝに
津波も伊勢の方より押し寄せて来る事あり
中津まゝに降る程の浪の回りのありしに
津から成るけしき日波なるたゞの程なり
海にさしこむやわゆる津のまゝなり
さしこむはしめ海に波は押し寄せて来る
よたよたの程の方よりおもしろくも
あつて海花はあつる
あつてもうつあつて松東の雲のふもた
たのまゝにさしこむ

津波のあつておもしろく海に
吉朝

巻の下の十一

夏の夜はあつてさういふや幣所ら
女の姿のまゝにさしこむ
あつてさしこむ

今日只津波の余波たつとさういふ津のまゝに
あつてさしこむ
あつてさしこむ

あつてさしこむ
あつてさしこむ
あつてさしこむ

あつてさしこむ
あつてさしこむ
あつてさしこむ

吉朝

舟あたるにのちさのこもくもきたる方
水まはるるにぬす目と多うつと明神を
浮くくわくく田む川成後。

粘の脊は綱目はとれと田村川 吉朝
粘のそ船訴とつふ名のきうーとまは
粘の鼻吹うつせまきわくー 吉朝
是よりさると低く山つと船つとくもあやま
る妙たうりるもさうなまきわくく谷を祖を
けくよ余るの声 粘さうん朗さうん一
声の杜宇あうすや負曰まを費るのゆ
穀もさうたうりー

何やうりく言やさう部く 吉朝
これ吾とさう 烟霞の痛疾たうりくか
く 吉朝

申くまはくく女松のけささ 吉朝
関の張張さうお出くさうーのさうさうわ
南よ向ふまはくくさうのあささうーのさ
くひささくさうさうさうさうさうさうさ
ゆさのさうさうさうさうさうさうさうさ
う船さうのさうさうさうさうさうさうさ
ねささうさうさうさうさうさうさうさ
あささうさうさうさうさうさうさうさ

万の...津の...
も...
さ

し...入...
さ

ゆ...田...
さ

中...
さ

す...
さ

遙...
さ

り...
さ

移...
さ

先...
さ

枇杷園士朗

尾張

鷗巢都負

安永甲午年正月

海軍大臣 矢野龍溪

海軍大臣 矢野龍溪

海軍大臣 矢野龍溪

飯後日記

越出雲守且水著

飯後のちあはれに海軍大臣の官舎に参り
と越の出雲守の官舎に参りて
するや朝明の海つらきうしむちうちうと
めき風あはれよる降れしつて舟出するも
あはぬものとして早め参りて
修初は風あはりするおめつて夜後の江の津
まに社あはれしるよ人を参りて面談あり
あはれ言ひけしむ海軍大臣の官舎に参りて
六月十二日なり

九ノ月二十三日

雲のいの中は清くはるかにあまの月 晴基
うつくしの心のおよひ白くはるかにうつくしぬ
る中身の別よかしの雲をよみまじくよらき
りけく風をよみまじりまはるかに色ハ清き
のちをよみまじりまはるかに月をよみ
あまの月をよみまじりまはるかに
うつくしき心のおよひ白くはるかにうつくしぬ
る中身の別よかしの雲をよみまじくよらき
りけく風をよみまじりまはるかに色ハ清き
のちをよみまじりまはるかに月をよみ
あまの月をよみまじりまはるかに

人々のあまの月をよみまじりまはるかに
うつくしき心のおよひ白くはるかにうつくしぬ
る中身の別よかしの雲をよみまじくよらき
りけく風をよみまじりまはるかに色ハ清き
のちをよみまじりまはるかに月をよみ
あまの月をよみまじりまはるかに

夏の雲のあまの月をよみまじりまはるかに
うつくしき心のおよひ白くはるかにうつくしぬ
る中身の別よかしの雲をよみまじくよらき
りけく風をよみまじりまはるかに色ハ清き
のちをよみまじりまはるかに月をよみ
あまの月をよみまじりまはるかに

くろくまのついでに〜若狭越へて日くしの
阿久野一城記一つけせしと水巻成るむ
今日思ふとあふる平時あふるやぬれ白
くく曲らぬはゆらよ〜とひき〜山ひえと
くく家おのせむ事入やうらみらる〜
せつとま〜く〜るまけまうと〜
りよ日神を信ずす石洞よあ濃り〜珍
と那骨を〜ゆ〜る〜
法界よ入ル〜め空海場を〜と〜
芥を〜る〜金堂を〜と〜
〜る〜る〜場也

曉初下十七

あ〜き〜く〜ゆ〜る〜あ〜ま〜さ〜り〜あ〜ま〜
〜あ〜の〜ま〜ま〜は〜ち〜た〜る〜
あ〜り〜や〜と〜水〜の〜も〜く〜ま〜お〜や〜つ〜か〜
水巻や〜と〜ま〜と〜ま〜と〜ま〜の〜ま〜あ〜
〜と〜相〜川〜よ〜り〜所〜の〜人〜ゆ〜り〜ま〜ぬ〜か〜ら〜
〜あ〜〜と〜何〜も〜わ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
〜り〜と〜村〜山〜の〜あ〜あ〜は〜懸〜ふ〜途〜く〜ふ〜と〜の〜酸〜
年を〜と〜り〜
〜あ〜れ〜や〜法〜師〜た〜ま〜〜
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

し海峽合の碑碑の昔の物語のふたつ〜
双鳥とある碑也
明徳院建幸のころあまよひくや〜あつる
波よ〜せ〜歌を〜ひり浪よ〜く〜遅夜の
文帝残さ〜せ給ふ〜ふがゆゑよあやうせし
急の浦と〜ふあわれ入る言のこぼれ海岸
蟻樹のせわくみる女あ〜残田〜て三都ハ
舟への風景五歩よむう十歩よむは〜
山よ〜
琴平城〜〜〜人あ〜んま本立 泉
水水

一巻の下の十九

阿〜〜〜あ〜あ〜の岸 味基
海〜〜魚を〜
胡笳とら〜その〜
きつちの後の浪の〜の民が城をぬき山よ
よつ〜入る事十餘町浪朝中絶言の哉せ
らま〜浪の玉中〜今う田中や
明徳院の浪浪浪浪〜鎌倉の中条〜
舟は放し〜照日の清う〜
ちたら冠〜俣よ〜兵本留
正四郎〜堂の平の小ね〜
〜〜〜浪の〜

大樹の命何れもくわくあゝ垣由ひ
及ひ方午間松橋より志極くまき此れ成
林ありめらまきしよらにわやのちりて正
所廟のちとく致すあり凡らひしと地をま
ましくまのかけよりまきわらまき唯口成
はらむありらる

日らまきうくまき梅寺よひひまらひ
情何れもくつ水とくむまきまき梅寺ま
後よ二と芳皇居何れもくまき後堂の午よ
後一まきとまき中比よ移り新よかつ

一焼刃下上

寺つ一旦破壊すくまきまきまき
あひ再び止観の法を成ひくまき
所廟の西水をつとむまきまきわらけ地
精舎ありまきまきまきまきまき
頗るまきまきまきまき
和室まきまきまきまきまき
障きまきまきまきまきまき
ちりまきまきまきまきまき
塙より葛の葉風まきまきまき
故の細声の顔めまきまきまき
なまきまきまき

控ふるよあはれ早のひらりゆ 此の

くせ残葉のむらりあはれ 此の

佛の皮あはれ 此の

さうのちる月よ 晴るをや 間雨の感よ 此の

れは 此の

つら 此の

あつる 此の

あつる 此の

あつる 此の

あつる 此の

あつる 此の

堯切下廿二

たふやうなちおたささ

み 此の

く 此の

ま 此の

あ 此の

ひ 此の

あ 此の

あ 此の

あ 此の

あ 此の

あ 此の

とらふをなまそふるの浮きあがり
この別をうり舟は浮板へせたり
帆たも六根まてかとも持しりく
なまよりお川へさそをなま
をりて出の癖もく一孤松春は
満ちると何れも肉つと腹は
大艶のこも渠まのよのよ
是はたご一形よあつてな
もうちぬりる半と何れも
瘦たると川あぬとあつて
せしも亦晴もるの肩骨をひく

一曉初下世三

たりむく柳は牡母をせし
ちやあ
幾やとあくお川よか
ものさひく改まか
何れもこれ舎まを
回一やりおまら
うらあつて夕刻
おま何たるの男
雁ふくすの先は
皆人さ浦をれ
さし

次の日女志すふ名くろくくき金糸浦出の山
深きと見れよ山に蜂の空巢はあやしく
限りなく穿ちたりり中真くくくく
水舌の流は煙浅深し身さ申えもつら
よららのわきわきとわらんとあうら
風浪の上よすくあし次の日又歴くは
阿ふたふれしは経りんと移んよ
世志向を舟よ系まらんやうや
水うね所とわらわらしきくくく
法奇残さく

月かおろく清柳の交わりし

曉初ノ下廿四

阿たりらうき程麻体とうり後とあふす
まはくは小倉亞相公のくくく左近の地
奥享のくくくくくくくくくくく
此この親者守よ後さあなりわき
例のくくくこの碑面よ

故左近藤原氏之墓

藤原氏一舟之墓

水後よふるるハ潤う部

堂中のの藤原公のくくく

墜後の碑をさきよあ

女後わくくくくく水方の際あるまき日

小吟未は侍ハきこ沖ハさし出く千俵の
 渡百尺の岩ハさるる梅の枝ありたるうぬと
 神陽儀を暇清すたふ言成さくは去る女
 館里柳海船とひぬさつめく舟成りせは江
 河や中もさく言る舟成り六忽碎るまよ風
 光の復たさくさたり地帯の美なきはあり
 清き一ふは思さるひくさあり 雲巻
 世待すくくひはさくく泥の海とひさまたよ
 つらね葉よ泥ぬらふ霧の船が 水
 おまひら船くはこの今よりまきふくまひあり

すさめりー

焼初ノ下廿五

とさり先きこあめし契つともなるもさくた
 おあるう嬉しうまは物もひくけ人くもひさむ
 鏡の湖さく海と金ふ山よぬさなりさる根
 あそいで明き出んとてさうきもひくまのよ
 ちりつとむさきとあふくハつとまものあ
 事かきとひうません今宵の美かきさく
 て今もあうさくさ風のもちや物さくさ
 とさく風をひひ雲のり方をめさくさ
 心閑す曉くさ風さくさくはり書室早ま
 さくさ月かへもさくさくさくさくさくさ
 てさくさくさくさくさくさくさくさくさ

好人なり 宿々わたりしう 志其思入る百と止
 中より 終りくむ人いえとあしせんすのちうら
 よる 志其思終りんとあしんすつていよとと
 又よ 数白そとていよと由所もありの水くさる
 たあしんすつて終りぬあしんすつていよとと
 終りぬとあしんすつていよととあしんすつていよとと
 とあしんすつていよととあしんすつていよとと
 金北山に河氷の志其思 攀事 雲里をうくしり
 そよよ衣袂裂や雪海 雲よひたるも雪成 吞
 舌を吐く 氷く 午時ぬつてさたむけけけ
 母の志其思の 懐深き志其思の 志其思の 北海一春

曉初ノ下世六

の形勢あり
 炎々の水才ゆひさ次びとあしんす
 清水すむはつんとすまら雲起 如佛
 山裏の里志其思の 志其思の 志其思の
 うらうらとあしんすつていよととあしんすつていよとと
 樂しむらとあしんすつていよととあしんすつていよとと
 志其思の 志其思の 志其思の 志其思の
 その志其思の 志其思の 志其思の 志其思の
 泥の志其思の 志其思の 志其思の 志其思の
 志其思の 志其思の 志其思の 志其思の
 志其思の 志其思の 志其思の 志其思の

杉とくく平り而山は風かをる

曉菴

羽黒より極をなまら湖のみさる夷の儔よ
やまら湖上のゆふ眺をうらうらとては
廣く水と水ひきほへりくくみ色のた
つらうま鏡のこの體をよおくくきき
のたゆくくはをうくく色静よ風情も

ゆきく是也

鴨の子の隙をくくつむ日暮

弘伝

魚飛てあ飯子月の教きは

弘止

今宵のあるくくはくく只より水本の流へ
流ふくくん内流流くく陸流をくくく

曉初下止

と色如けははるくくさくくめく磯の神所
翅たをえをら通あくくこをくく舟と
後り流くはたをくく必くくは流めと静う
さくくんやとくく舟をくくくくくくく
ゆうせはくくく自侍る小庭むくくくく
くくあり蚕のをくくく出くくくくく
あまらそくくもやをせたりくく蝶よ
くくくくくくくくくくくくくく
蚕よ蚊よ相ひくくくくくくくく
夜明ぬくくくくくく舟よある舟とくく
あいたくくくくや和くくくくくく

わゆる舟あしり山くぬ海とす。這ひよ
たもやうみく腰の浪ようちくくきす
と刻しるうごとくこまはつまよなるるり
蟻つてふもりの磯踏を附片輪は次曲
らまこ或ハ倒^ハよかしく本末の波は漫せ
あしと成画ようつてあしは曲柄は新様
ひさおあつてかたきくちむく見たりん
はくちくも環^ハ満くゆきまはるは法修よ
入るひは海はひく
磯が舟とくこまりつて波のなるとくよ
ほあはれ鴨島岩首村とくああたりのあり

焼初下世八

きこい河からく魚が成かす人侍も海とくあ
ある盤室のもも世とく人あまこ穴居はと
ひめくま世もよる代も人への代とあり
てふれちくハすも傳へゆり今中は成り
あへんく一とくこく國へたまはるはた
くくく
源一ひら男ハ意和布女ハ二幅 文書
人の売のこくこくハまゆかんき 文書
鳴神よすは迎穴の極し南 文書
釣舟のあふふかしくひつて魚買ひ求めぬ
世成すた切よまらして夕絹たふ十母てふ

魚形うととれそ名心と珍しくはがり日湖
灘と舟の中葉るかごとく波のた
ちかき流とゆるりよ呼ふとと眩め
ととく船着よりち却し終ひぬこま文書
形も男老ハあおねととまは必と剛ハ何
たぐうめさこようめとと出れやとやう
書交世はくあうとりのまはけ捲くまは
つうつと書ぬるよまのまはとく
漕わたりとちめななくと日書なま
のま目のやまゆめと書よまる船子のい
書夜とたりとと海つうのまはあまこよ

やうととれあやふととまはとと一舟ハあ
波ハとととと海とととととととととと
款まなくと水船のうと神とととととと
声浅ととととととととととととととと
連たる星ととととととととととととと
ととととととととととととととととと
けはたはととととととととととととと
たもたととととととととととととと
ととととととととととととととととと
志も心形ととととととととととととと
かたととととととととととととととと

いりあるいりやまらうひてまねんまを目比の
頼し計成も念し後人部をさんかうす
しひ希参考とし家事う又とりのりし
あてく借やとよあまよ破くこよ火の二も
まゆねとよせよくと斬くこえ出してやう
なまらふ木のかの留しひぬよ船たると陸より
と人の声うけく世母を危き事なまこ
世風のなまねんよまやまか覆はくあま
るここと命あしこことかおとのまこことゆめ
たへては躍よりととりよりまよやとりしゆまの
金つまよまらひひりく夜すから必ち定すひ

完初下三

三白こよよ日和つらりひ

おちやけのこころねよまをひまこく浦出れ
あうま強様をくまをまこととれし出ま地
なまうしこまの首成出はよ比せの瀧邊
の二島なまをまの島のためたままらるる

天稟充貨の

皇朝あふうさうめやたぬしよはしめや

六月廿九日海のこくすくしと舟の出雲橋よ
ゆりしと親しと後まむくし事ぬあ
賀しははは唱ふ

于时安永四年乙未七月津宮

[Faint, mostly illegible handwritten text in a cursive style, possibly a letter or a record.]

焼初下三上

取志る

千里の游美江上の花影残 溜カクイく
 福ととして海を去る行くは
 月下よ却く浮んく月下よ 遊ユウ
 たの志は或れはのまを憂うは
 人跡志るくまは遊戯あさく
 游子よ久き遊戯の情を

レ
ミ
ミ

か形ぬまゝく句くうへや一笑の
実残うゑ布供く藤中
心持む人平魚平

了明七下末反音雨卷

巻基虫

曉初下三十二

吉陽島須賀率了り里の情成すもむより
やうく枝のそむわく切り是もひりたぬすり
門出の裁まするんことそむ書志く
花より花をそむる形也二書唐
おやうくはありたる橋日記とひあをそむ花
すもひり合敷由の次よたそむいよむ。
うゑくくしめありぬきくそむくあやを登
きこせすちんそむちんそむらうそむ
けいぬいんそむひきそむ白字つひ
そむすそむ事そむいん

風子の沖の汐あひまうし決らんよきり
つらつらの中あゝ高瀬波あしる海生の
をりとなさうりあうり

雪膚を波あふらけくまうりぬ

須磨浦

草枯く枯ぬふはすのをみよ
日何く次たよまうのあうりも自今あ
すつらとあうりくまのああわたらんあ
あしとけうあ人のかまらまらあああ
まふたすくまらあうりなま
やすうりのあも人もあうり

西人のまうし 幽棲あうり ぬき精金の花の
まらあうりまらあうりまらあうり
たく神のまらあうりまらあうり

貴くまらあうりまらあうり

少無れまらあうり中まらあうり
ゆりたるまらあうりあうりあうり
ゆる其あうりあうりあうりあうり
あうりあうりあうりあうりあうり
遊出程あうりあうりあうりあうり
揚柳あうりあうりあうりあうり

喜着京喜り人のあつて

花の名跡を幾日あつて大和の奥をうら
々然ハ秋のやうに散れまゝとほたたる
又昔くると昔を懐かむる

難波よつとつとひく日強し一の浦よ越ふ

歳暮は鈴流に木のけり也

紀伊の玉よわたらんくとく母は粟津の社
よとむ

あつた女は海苔掻きやむし雛

吹上のうらつとむ

吹井くま風ふくまの甲

紀の川は水と金の手紙より出るよ

いととねあつた志をこぼれあつたり

花喰ひは紀の川のをまはくま結

夕六の書状うけくとまらと散れまゝはる

いととつとつとつとつとつとつとつとつと

初奥陰よ入る母あつたりおのつとつとつと

綿よ花を散れ啼てほろお月おあけり

あつた物に涙あつたつとつとつとつとつと

名跡のつとつと

花をよはる佛やまの山

女人堂

凡よとてほひつゝ芳世山居集とら影せふ
まうらの和号法との一。あまのまの
冊子改あたはらるりゆふをききまひく
あゝ海のさまぬんまゝのつゝかゝる能く
くそ世のうさまゆりかゝるやまゝ
法法宗後や、唯素の妙法告くはさき
僧ためと命とくくの昔法水
たぬく山海法をたせ
んけりり穂麦うまゝの穂
田田

曉初、下三十六

南越入て志やなつゝ一と一所のねや
く海もくもくもひと日あぬ日と
てかあこもたをまゝの形くははりふあ
形くは元実志て坊舎巻法並へくまゝ
此地の杜観るあり一は色のみ衰廢の時
多々千載の叢よとくめ只村老の口
後あの花よ文字法むる
ま日野のゆりある社勢何の
屋とま

華よ小藤こころまじりて裏の山

花の香かたけふ井手の流りさそくう治の里よ
出ふは夕の暮の空をわづらうねる橋のささの
色も物の河や若人のあさうらまはば桜雲の
こころまじりて師ぬ
梅雪のつら杖もあそく水鶴のささ
卯月廿日あそく朝の風よりかへるのやうそ
志もさそく里地よ新芳哉やちたふ
り京
月紗浅所あし一市のさそ
山よ枝浅びと日寂光地よさそくりほるふ

一曉初ノ下三十七

あやみさそく里地の出暮りさそくまじりて
かへるまじりて池の汀のたすむひやして
又よ女房のけけりさそく油双眸さうかへるのあ
みさそく流津むらさき清浄の池誓し橋あま
少子浅拾りさそくさそくたふさそくのあ
目けさそくや薄雲のゆる蝶の是
大系此里程流りさそく舟移入りさかめ在中將の
雪浅さそくひさそくさそくさそくさそくさそく
さそくさそく惟喬清子の古廟浅流ん
卯の花の雪端さそくさそくさそく
さそくさそく

松吹何れ志証の書よりす、好の声何れり哉
あつらひつらく、雲一とくひとひあひたるを、
さほちありしは、養子あつて、養子あつてと
飛あつたき、好姑に、好姑に、好姑に、
を、好姑に、好姑に、好姑に、好姑に、
つ、好姑に、好姑に、好姑に、好姑に、

あつたき、好姑に、好姑に、好姑に、好姑に、

寓居

年くしたる、と人、五月の命、
其、後の事、の、事、の、事、の、事、の、事、
尾湯よ、と、あつた、と、あつた、と、あつた、

曉初、下二十九

伊豫の玉松山の、草、草、草、草、
玉、玉、玉、玉、玉、玉、玉、玉、
の、の、の、の、の、の、の、の、
目、目、目、目、目、目、目、目、
は、は、は、は、は、は、は、は、
す、す、す、す、す、す、す、す、
仲、仲、仲、仲、仲、仲、仲、仲、
月、月、月、月、月、月、月、月、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
大、大、大、大、大、大、大、大、
踏、踏、踏、踏、踏、踏、踏、踏、

曉基、
崇基、
外央、
佳崇、
芝

眼よ志むらうらちるれ明星
 何たるまじもめくたを笛成り
 興すのらす家秋子のしけ
 月うけくおま成りせん伊勢の松
 赤のう赤をさ家七う枝
 執事の名も成りたる擲て
 一日うらまきまの如きあり
 縁の縁うつ高の藤や
 破まき草うらまきこのまきり
 よらまき八鏡の如き藤や
 正月たるうらまきの志うらまき

基 棠 央 基 芝 棠 央 芝 棠 央 芝 基 棠 央

曉初下四

里の花垂程のなむむらぶ
 ちね橋造る山吹の如き
 旅主のうらまき飲りく酒の我
 月成りむらまき地をまき
 麦枯く鶯鳴くある無名の
 水とらむ身て走る川明け
 歩み百とらたてや母ははるん
 唯目あのおう成りあさ
 葉釜あゆむ終る山の松の風
 睡まきる松耳成りうらまき
 螺貝も碎けよと吹散まき

基 芝 棠 央 基 芝 棠 央 芝 基 棠 央

副車押ゆるうこの草の月
 功徳池の魚やうねるはく
 夏の中はよををうらみのむら
 家よよあふまきこ徳地海の奥
 塔さう一の藤の枯れまゝ知
 日の西うらまをこをとり
 む尾とめの夢をこをよ
 扇成揚るまき柳の風
 棠 棠 棠 棠 棠 棠 棠

名録

薪のこまきつ成出まふもる日
 平 堂 更

空のふもる成成猫のまなこ
 柳まきうらまをこをよ
 井のふもる月よまきまき
 まくやあうらまをこをよ
 雲さ灯よ柳の光やあ夜時
 夏の月まきまきまきまき
 海 浪
 夏影よ鋪割まきまきまき
 うらまのまきまきまきまき
 海まのまきまきまきまき
 うらまのまきまきまきまき
 明 峯 規 凡 東 湖 佳 棠 百 池 非 央
 拖 膝 半 桂 兄 子 騏 道

侍立

幾たびひびく砧の音もよほしとく
君のこゝろにけしきつたしほく
をすこゝろとたき種の日を
月影やふたつをくつし
日よ水よ入る声もく
夕影やそのとある花の曇
かんとくるをさ坂の杉よとまらり

文通

平寿 几董
越後白根 文和
袁鈞
、 峻湖
加芥天 元室
仙基全 佞官
冬古屋 士朗
カ岱
岱青

曉初下四十二

ありあはむ人かきさし
風物や葉の音よ月夜さ
み月あやまをそと水さく夕
色橋よとつ月のわづらり
うらむすの葉よまらり
湖系よたつ水さく夕
涼よさやあまをそと
木の音よりあまをそと
さくつ月の月夜よおま
まらつ水さく夕
人のさ家の裏より出る

羅城 関毛 多奈 西海 休那 赤壺 桂五 五周 純鳳 沙漠 岳輅

新ふ日も移るはくく龍城を
 碎さるるやういへくかりの梅花
 たるるあの中よと花のあはれ
 祇堂を林夫の写さくまの月
 雨止くさるる 雲のくく
 来るく志の心とまきとまのま
 休極く友なりうくくく夕か
 二月月すすき道をゆりたり
 月や日やつまよつやくく梅
 終むくくの声なきくく星月夜
 すくくく休くく秋の気かきぬ

曉初ノ下四三

少如

けく

番番

昆明

越毛

稻城

素只

呼是

双府

石墨

森良

教寺やあきなりもくく蟻の類
 神のくくくくくく虫のまじり
 天明七年丁酉宵月旅洛陽旅宿著之
 白圖 狙乃

まきの葉をよく枝の花はく
おれおれの時とほく多敷く
人間の心の涯をよく雪の内よ
涵養業談をよき處のよきよ
夏を待たぬよけの葉人このよよ
心たせらふよけく出さるあつた
大和様子かゝりよけよ葉なまよ

大和様子かゝりよけよ葉なまよ
涵養業談をよき處のよきよ
夏を待たぬよけの葉人このよよ
心たせらふよけく出さるあつた
大和様子かゝりよけよ葉なまよ

曉
初
五日

舟のそと身
 暁初下五
 舟のそと身
 暁初下五
 舟のそと身
 暁初下五
 舟のそと身
 暁初下五

暁初下五

舟のそと身
 暁初下五
 舟のそと身
 暁初下五
 舟のそと身
 暁初下五
 舟のそと身
 暁初下五

四

くさくさのこゝろをうり下毛よほき
まなうくと控り、の皮
やまの尾は縄無く患る目覚め
人のよも存張らうと踏こす
夢の穂のまれうつ向く月影
おろそそをすする夢の湯釜の秋
摺る雲のゆるり形ある袖の雲
おのひ竜田の山の夕ぐさ
笑先よやつと負出る糟俵
隣のおのうもさるまきさ
るのほろりおととあまなり

水 濁 四 毛 喜 墓 土 水 毛 喜 塚

曉初下四八

まあつりく丸藤たり能く
精進堂の樓つりく眺と
四五所先ん後あつてそ
坊縁ふり使のちろこ人出
飛の尾の髪もなるおま
着生れの着とのまきへ
車の邊よ初ら家川
筆の色もあま言張れふ林の
山境あつて四子張り
一休の控杖とくむる松の
雲雲い銘よはつて板たり

墓 四 濁 水 塚 喜 四 墓 土 水 毛 喜 塚

浦風の日影は遠くまで
 人ともくまなくのりてあそ
 ぶころあそぶころあそぶころ
 新緑のころあそぶころあそぶ
 花ももあそぶころあそぶ
 海ももあそぶころあそぶ

水 毛 春 城 洲 磯

白田 五 曉臺 五
 鉢青 五 羅城 五
 蘭水 五 問毛 五
 士朗 五 枕草 一

曉初、下中七

孝庵
 あそびあそびあそびあそび
 むらあそびあそびあそびあそび
 美らあそびあそびあそびあそび
 秋風のあそびあそびあそびあそび
 月あそびあそびあそびあそび
 蜜柑あそびあそびあそびあそび
 秋山のあそびあそびあそびあそび
 行りあそびあそびあそびあそび
 葉あそびあそびあそびあそび
 花あそびあそびあそびあそび

代書 古納 紀風 入素 曉臺 春 洲 風 基

多るるの清い月の影ハたれ
 地獄割やうな定月のみら
 玉の祥今宵も煉ぬん
 何ともしも母さゝの影の影
 名もよしの何もしも六南因幡堂
 寛平の代のはまてりまめく
 去年のまよこのはまてり
 在風の市もあつてはむく
 柳もはたつてはむく
 悴る事ハ歎ぬ影南村
 夏まハつてはむく

曉初下四八

蟬啼きもるるのまはりの影
 何ともしも母さゝの影の影
 根つてはむく影ハたれ
 何ともしも母さゝの影の影
 さゝの影の影の影
 実基は海もつてはむく
 何ともしも母さゝの影の影
 何ともしも母さゝの影の影
 何ともしも母さゝの影の影
 何ともしも母さゝの影の影

朔 風 素 基 朔 風 素 基 朔 風 素 基 朔 風 素 基

名越山の城の目よりくさるる雲よ
霧をよけ送るるちの美雪子
むのよとと霧の報やるをん
さむい鳥帽子のとうちり

鳳 素 基 喜

岱青 八

士朗 七

紀鳳 七

入素 七

曉臺 七

曉初 下四十九

花藝

花ふり人皆見よ青八よ
うけ申しと蝶鳥のや
葉の海をたたく春めきて
汁色も垣根倒るる
所く月成定めぬあめ
角よかすまの葉の原
ををねくまの葉の林の丸
そよねをくまの葉の林の丸
報の美よあを湛くさせ
つちよたたるはたの海松房

羅城

紫水 圓毛 楚分 士朗 狐火 白圓 曉臺 水 城

和りの音よ志坊と暮るつ
兔のそと残送るあつらひ
我もよとのと物もよまぬ言索
ふ新梅よらうとさあつらひ
芋桂とよに人ゆきれもよ
館をよほく描抱く舞る
十喜の月つきたと風う人紅
帘あささ里のりりぬけ
水りあれ面乞るよ半ひけ
結ひえつらま姫一八十
三ッ鎌々ふより返よつけとそ

分 毛 丈 朔 基 因 水 分 朗

曉初下十

枕のこもとよちりきあつらひ
か夜ゆ家別あつらひとの借を隣まきり
是へあつらひ血のよを拭くとも
そよ志の声お中の巖葉よ舞て
をよとよひ喜り一牛よりきよふ
何とやう物の言多き人の後
名をよとよかりのあつらひと海残
井川の月より明くあつらひの和
望くつらひとる屋根の始末
身の杖成海士と舞るおとよ
とてとよとあつらひと風の浮き

丈 因 基 水 城 各 毛 丈 朔 基 因

山々の声の中より響く日や
あまたしく駒をよきあそびせ
花の陰産子色一かく縁
はくま一了らぬ又さね

塔 水 毛 分

羅城 五 蘭水 五
間毛 五 楚分 五
士朗 四 珉丈 五
白凶 四 曉基 四

曉初ノ...

無

去るまじく〜く〜ぬくの神味嘆
〜後ふたつ成法ふは成法の結
小笠原水よ精なる人〜え〜
畠の鶉の音 阿曇のや
袖月又浮車を定むらん
暮るよ阿曇ある後の杖風
鬼灯ハ層々さるる暗あけ
美よたると〜〜源子の有
暁の暁と志すつ〜声よ
大渾そりの果ハ志す

少如
岳輅
稻城
曉基
叫道
如
基
輅
塔

とくそく鼓吹撓めつと
足利殿代ハ末と物と
振捨やたつ伐出山月
好まありるよ桑青ちる
中世の女来運びよある
肩抱ちうふ眼をいし
花の多よはくさく牛の面
鈴菜もつせ八蝶のねとく
野路のまに和寺の皇子
あやしくなりよをたき
おとよと八申別よぬの
除出

如 塔 基 是 格 如 塔 基 是 格 如

曉初下五十二

大角豆うつこのあさみより
繩ふりのさき休なまの
園よゆきとせふ次よは
南さ次書よは津津の海
小舟秋神よは塩辛張
秋壇のあきやうよふ
長明くゆる星の朝日
おとよとよはあたる
菰女男のうま
南無の花
さくらの柳

格 如 塔 基 是 格 如 塔 基 是 格

周中の多岐人のまはりかまらて
をみかたなるまある顔のむらう
そは後くく妹う垣根のまのつ
塚とともあるまとうつむ二二

基 格 塚

少如七

岳輅八

稻城七

曉基七

呼道

曉初下五十二

毒

今更のまりくよはうらうら

やすうひの花をふまはまふかたあはま

とつさめと花咲玉のあらまふか

梅柳まのうの枝なるうらうら

うけろくまは何れもい出を枯穂ま

まの産まむお敷ふのうらうら

おまのまれとまのけすく人まあや

まおまもまのまて空世のまの南

ま依のまをまのまてまのま

ますらうら

曉基

岱青

白園

岳輅

基格

趙亮

西よふれしゆせうけくまの由
 昔も日れ出ぬうちのも月夜
 うらひまの鳴く鳥もさゆか
 枝をさく梅の枝の朽木が
 とかくくと大城禁山やねる月
 らしめ 社の花もさうさうさ
 人老く浮山のそれ残さるひたり
 朝うはらふ出る花の草花
 揚ひさうりたきまの日は万さ
 正月十三日伊勢のあまの
 柳の次の社事をさるる

紀風
 梅生
 嘆墓
 素洲
 社尹
 稻城
 隠六
 叢免
 可有

曉初下五十四

春風やをうと海の柳子うら
 春柳よら海のうられさたり
 水空田やさうと道るまのい
 りまをを振りぬ人を情なり
 白うをやまのあつと夕家あ
 るまよ子のうらやまうす
 まゆと鳴出せると鶯の声
 浅灘や葉粒やくの鼻粒

士初
 曉墓
 呼道
 圃曉
 一声
 文朔
 祖乃
 入素

夏

けりさうらうらうたれき雲水

石岱

朔雲のゆくはを流る村あり

嵩山

夏の夜残とりにひらけたる月の

常水

西上人の枯舟の芒うたをうた

昆崙と緑色一実方境の世哉

うらのと人の菊雨と筆り哉

流る世と送りある

水つとくも空を流るの世哉

士能

夕に高湖の水をさうたを

昆明

虚の舟やたるとこの秋の拙年

閩毛

かてらうたも二月入る西の系

砥文

舟の子や一、夜よりつと八年は

曉臺

曉初下五十五

あつめ入るやうと悲しき世哉

新友

月よも夜南てあめんけいむ

着遊

後の夜のおよたくとつらなり

羅城

流る春をよとくと世の蒼

台冲

美舟のふくとくさ月を

卓池

うらつと首り入るとなると

曉臺

月よもうらんと世の世を

趙島

と世のあつと世を

扁洲

郭ふおはつと世のわと

士能

夢かつとよと世を

岳峪

虫法ねふくく後や唐の音や
 颯うらのうたつとみまきて
 もつね魚西施うれのまうり
 刺せ中のみまうのひくうれ
 丁卯のうめいの年六月二日
 平相公信長公の二百年の老より
 ありてせたまふとく尾張の玉
 徳見寺より職法供養うた
 おとくとりりつとみまは
 つうふまは
 けふの法はつうとみまのま
 曉基

曉初下五十六

柱ねねくくあふるく
 あうまくくくはまふ
 夕立や麻の葉あよみ
 長良川
 くらねりとのいあもくれ
 以あふる風流あふの
 徳見寺今もや徳見寺
 昔のまふくくく
 中ふくくくくくく
 秋

平安
 比央
 楚か
 代書
 他即
 沂風
 北橋
 白岡
 純鳳

枯くくろきまねをみゆき林の山
 のう海の上も林のゆふく
 甲子やまのよまぬきけつ
 ちつ四よきひく
 満月やぐよき葉も秋の色
 ちりふまひひたき月の色
 まゆよいつたふりくをみる
 わうまきま今ふる思きても
 音くくのちよは葉のつらぬ
 秋風や葉のよを口のきく
 月ひつら年ふ水の流るうれ

士智
 羅城
 大集
 岳格
 岩松
 支
 子京
 集巻
 呂城
 貝山
 耕魚

曉初下五十七

すはちやや葉のよをみる
 雲くく月よ林のう流るうれ
 月見まねく林の山の上
 夕ゆのれくわらわく林の色
 陣やうつらふりてふま月
 猫掃のまを流るけく奇能
 古伝とれまきまぬき
 移をまきまぬきまぬき
 ちりふまひひたき月の色
 つまきまぬきまぬきまぬき
 柿の葉のよをみる

鈍平
 士雄
 集巻
 圓毛
 荷葉
 羅城
 桃江
 亦人
 休尼
 宇交
 睦吳

朝う海の花鳥ささくはまはら

杉六

娘戎うゑのひさ

うささきの顔をしつらなまの月

圃嶽

穂芒のささくさむむささきなり

万丈

後の玉うらなぶ志なり穂の而

^{うさ}魚池

小さうしやさき生たる葉の葉

龜亭

梅あゝや種の中と山ねや

岱青

燒栗や梅のうらなぶ葉の葉

紀風

けしや梅よりけしなぶ葉の葉

沙莫

けしうらなぶ葉の葉

昆明

る穂の二の穂うらなぶ葉の葉

稻城

曉初下五十八

八月の雲わたりもや鴨の声

猿丈

まづいさゝか松あゝるるの灯の煙

土納

山鳥のけりうらなぶのあゝるる

曉臺

七年八月ひさくさるるぬすまの

白ト

あゝ

冬梅なごやハ伊吹ねらうし

亞満

る相田あゝるる梅ささき

曉臺

たさうささきささき

曇水

冬梅なごや梅かたの葉ささき

茶壺

けりうらなぶ葉の葉

少如

炭うすのちを浅崩すや丹波山
 雪ふすの浅焚焚く海を舟渡
 雪のふれはせん出せたる時を
 殊たぐさし海を舟渡勢あらう
 枯草の残を却てく月よ暮るに
 冬もともや蟻塩けつる体のは
 むつちしうは枯草のひとらぬ
 志るもく終る嵐の日とならぬ
 海むたふらうけくもたぬ乳
 雪もともくも枯草と取りよなり
 曉の雪もつらや一年もたなり

曉初下五九

計之

大阜

羅城

素洲

呂宙

子繩

吉朗

友成

禁を

呼道

代青

雪の目やいつ志うあめ夕のあり
 素角

雪の降らる日俗の人くは訪

まき

雪守意ら凡らる海のすくは
 降雪よまきふけぬるゆきか合
 とわあまらるおの何雪の網
 あめの一ひの雪とつ其るま乃山
 さしや夕白のあまらる時
 燈よ佛残よとん十あう南
 冬日氣鷲の掃ひやくそ
 葉の花よま葉の煙かふる

餘文

四光

眠情

宇久

沂風

強吳

入素

桐門

浮雲の中よりの戸

平安 桃睡

枯たうと艶ふけの初

卓池

うらり割く花をさるる雷の富

桃生

しきりいひはるる年を晴ら

閻毛

三月八日申摘月

曉初下六十

若雨叟在世の俳諧といはれぬと

二三集 梅縁うらけおきりらり

ことせのむし 流るる人空

かりりあふら志乃共くはるる

さるる米米園の庭雅悲み

七部と集あきぬく世の空を

かぬは是作集をやらん



官許

龍聖湯

血の道一切の大妙薬

一日分 定價金四錢

此龍聖湯ハ産前さん後ち此道の大妙薬にして昔より血の道系数多ありとてとも他種類なき奇系なり用ひて功験大なるを志す
つし委實ハ此能き事志す

登龍丸 龍聖湯

本舗

東京神田末廣町七番地

青雲堂英屋小堀謹製

書

同町

坂上半七

大傳馬町三丁目

東生亀治郎

通油町

水野慶次郎

馬喰町三丁目

木林屋治兵衛

浅州茅町三丁目

北澤伊八

神田通新石町

雁金屋仙蔵

外神田松住町

別所平七

浅州清島町

山崎勝蔵

外神田末廣町青雲堂英屋文蔵

林

